【03-C2-001】　養護教諭がコーディネートした事例（高校２年生Ａ子）

級友とのトラブルから進路変更を希望するＡ子を別室登校でしのいだ事例

キーワード：女子同士の対立　コーディネーション　別室登校－指導・援助の視点

この事例解説では、早急な退学を望む生徒に対し、別室登校でしのぎながら支援したかかわりをまとめました。

問題の概要

Ａ子やＢ子を中心とする数人のグループが中心になって、体育祭の種目毎の出場者調整やクラス旗づくり等の企画準備にとりかかり始めた。

ある日、仕切りたがりで、やや感情的になりやすい親分肌のＢ子は、正義感が強く、自分の意見をハッキリ言うＡ子との意見の違いから、言い合いになった。そして、グループ内のメンバーから、他人の痛いところをハッキリ言うＡ子の強い性格が糾弾される図式になってしまった。

以後、Ｂ子たちは、Ａ子を無視するようになった。メンバーの中にはＢ子に同調しながらも、そのやり方はよくないと思う者もいた。しかし、グループ内で仲間はずれにされることを心配し、Ｂ子と行動をともにしていた。

Ａ子は、メールでＢ子と話し合おうとしたが、互いに感情的なやりとりになってしまい、一層関係はこじれてしまった。ただ、中学校から仲の良い級友のＣ子には、メールで今回の出来事について連絡を取り合っていた。

このような中、Ａ子は、体育祭の２週間程前に、突然「あの学校にはもう行きたくない」「学校をやめる」と母親に言い、登校しようとしなくなった。どうしていいのかわからなくなった母親からの連絡で、担任はその夜、家庭訪問をした。

対応の概要

1　退学を思いとどまらせる

最初の家庭訪問の時、Ａ子は、「学校には戻るつもりはない」と転校を強く望んでいた。転校が難しいならば、すぐにでも退学届けを出したいということであった。

こうした勢いに、両親も困惑していた。担任は、Ｃ子を伴って家庭訪問したり、保護者と会うための家庭訪問も含め、数回Ａ子を訪れた。そのようにして**Ａ子の考えを尊重しつつも結論を引き延ばし、時間稼ぎを図った**のである。そして、担任は体育祭をよいきっかけにしようとして別室登校を促したが、実現しなかった。

しばらくして、学習意欲の高いＡ子は、「転校するにしても２学年の単位を習得しておけば３年生に編入できる。無理に教室に行くことを考えず、別室登校をしながら単位を取ることを考えてはどうか」という提案を受け入れた。

早急な進路変更は何とか思いとどまり、まずは別室登校をしてみることになったのである。

2　別室登校を実現

教育相談課を中心に、学年団、教務課等で相談し、校内で別室登校を支援する体制を作った。

・別室登校に対する全職員の共通理解を図る
・関係者で支援会議を開き対応を協議する
・高い学習意欲に応えるため、教科指導を充実させていく

登校途中で帰ってしまうなど、別室登校はすんなりとは実現しなかったが、焦らず、いろいろな方法を試みた。その結果、Ｃ子に家に寄ってもらい、父の車で送ってもらうことで別室登校ができた。翌日以降はＣ子のサポートがなくても、父の車で登校することができた。

別室登校では、教科担任から出された課題や、教科担任からの個別指導に取り組んだ。教師と会うことは抵抗感が薄かったため、多くの教師が、安心して別室で勉強していいことを伝えながらかかわりを持つようにした。

3　別室での級友からのサポート

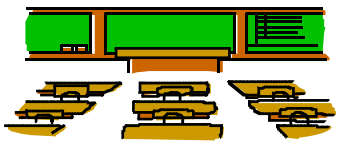
養護教諭との話の中で、Ａ子は突然学校を休み始めたため、学級のみんなが自分のことをどう思っているのか、わがまま、自分勝手な人間と思われていないか心配していることがわかった。Ｂ子とは、やはり会いたくないとのことであった。

そこで、Ａ子の同意を得ながら、Ｃ子をはじめ、２、３人の級友に別室を訪問してもらうことにした。さらに特定の級友に会ってもいいということで、それも実現させた。Ａ子を訪問する生徒たちには、事前、事後の面談でＡ子の状況を伝えたり、フォローしたりもした。こうした接触を通して、Ｂ子がＡ子の欠席を気にかけていることがわかった。

これと平行して、年度途中の転校は困難であること、２年生の単位が修得できれば進路変更しても、後々かなり有利であることなどをガイダンスした。

ある日、Ａ子には、Ｂ子と会って話しをしたい思いもあることがわかり、Ｂ子と直接会ってみることを勧めてみた。結局、養護教諭が立ち会うことを条ハーサルもした。話し合いは、両者の言い分をくみ取ったり翻訳しながら理解させようとした養護教諭の巧みさもあって、両者は、「もう一度やり直してみる」「教室に入ってみる」ことになった。

翌朝、Ｂ子が別室にＡ子を迎えに来て、一緒に教室に入ることができた。



実践のポイント

1　「時間稼ぎ」が大切

Ａ子のように、怒りや勢いに任せて退学や転校を口走り、「今すぐ」実現しようとする場合があります。親も何とか思いとどまらせようと、あの手この手で説得を試みても、子どもは頑として聞き入れようとせず、「もうこの学校にはいられない」「新しい環境でやり直したいし、やり直せる」という子どもの勢いに巻き込まれ、どう答えていいか困ったり、負けて同意したくなったりすることがあります。

こうしたとき必要なことは、「**適切な時間稼ぎ**」です。「どうしたらいいものかなあ…」と言って、困りながらその場をしのいでいくことが必要です。性急な説得や、「そんなことに負けるな」といった正論は逆効果になる場合が少なくありません。

Ａ子は悔しさや絶望感に苦しめられて、やめたい、つまり「今すぐやめざるを得ないと思うほど混乱して余裕をなくしている」のかもしれません。そうしたＡ子の思いを丁寧に理解しようとしながら、「困ったね」「こんなアイディアもあるんだけど…」などと言いつつ、混乱期を抜け出るまで時間を稼ぐのです。

このような、教師が中に入っての時間稼ぎは、「Ａ子が不快な感情の支配から抜け出る時間」「現実検討に目を向けるようになるための時間」そして「親のゆとりを生む時間」を稼いでいるのです。

2　資源をコーディネートして対応する

別室登校を決意しても、Ａ子にとって学校は屈辱感や恐怖感が残る場であり、Ｂ子たちの存在が重くのしかかっていると考えられます。

そこで、「**迎えに寄ってくれるＣ子**」「**車での登校できること**」「**高い学習意欲**」「**別室での学習メニュー**」「**別室に来てくれる級友**」といった資源（Ａ子の役に立つこと、力になること）の活用が功を奏しました。また、「**Ｂ子との話し合い**」も、養護教諭が司会役で話し合いに参加することで資源化できたと言えます。

このように、使える資源を丁寧かつ慎重に調整しながらつなぎ合わせていくことが支援の重要なポイントになります。そのために、フットワークよく情報を収集・伝達したり、連絡調整していくことが大切です。